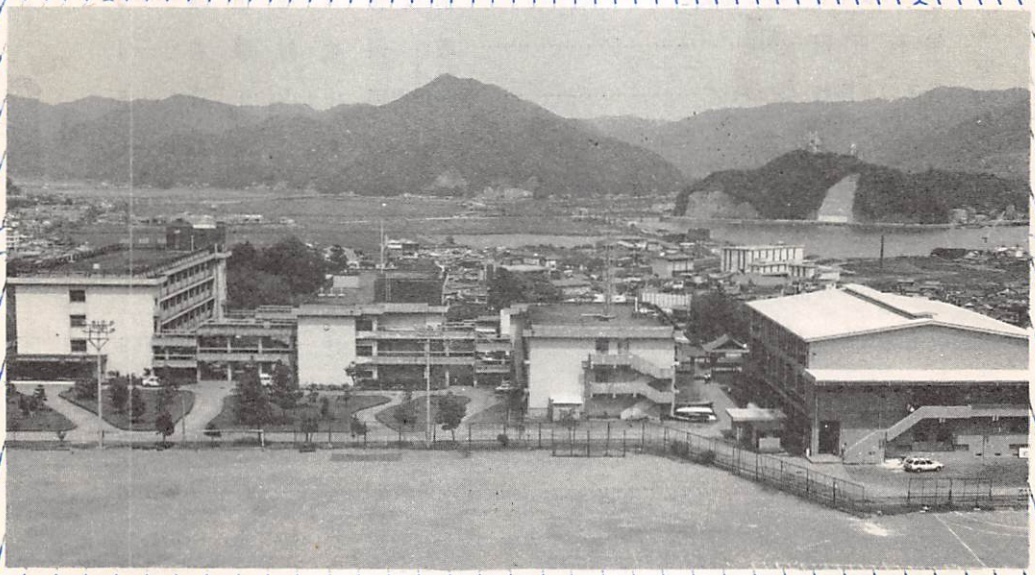
第10号
昭和60年
1985

会報

にしきうら



高知県立須崎工業高等学校同窓会

目　　次

ご　挨　拶

森岡校長先生をお迎えして……同窓会長　清　家　　寛……1

ご　挨　拶……校　長　森　岡　　清……2

須工のますますのご発展を……前校長　宮　地　恒　雄……3

学校近況……教　頭　竹　村　義　典……4

最近の進路状況について……進路指導部　中　山　正　彦……5

京滋支部だより……大　崎　栄　郎……6

この夏、思いつくまゝに（大阪支部）……楠　瀬　富　万……7

40年３Ｔ近況（電気通信科だより）……田　中　一　郎……8

ソフトボール部の１年

（イルターハイに出場して）……津　野　　隆・伊　藤　正　孝……9

三十四年ぶりの勝利……吉　本　　伸……10

昭和59年度決算報告……11

昭和60年度予算……11

事務局だより……事務局長　島　崎　良　一……12

終身会費納入者名……13～19

会　　則……20

各種証明証の発行について……21

編集後記……21

ご挨拶

森岡校長先生をお迎えして

同窓会長　清家　寛

同窓会の皆様、お元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。

会報「にしきうら」もお蔭さまで第一〇号を発刊することができました。これも一重に事務局の先生方はじめ関係各位の御努力の賜物でございます。

日頃の御労苦に対し、会員を代表して心から感謝と御礼を申し上げます。

さて、皆様には既に御承知の通り本年四月一日の教職員異動におきまして、母校の宮地恒雄校長先生には、高知市の小津高校長に御栄転されました。後任には、高知工業高校教頭であられました、森岡清先生が校長に御栄進、御着任されました。

宮地前校長先生は、三ケ年の長きに亘り、母校並に同窓会発展のために数々の業績を残されました。その御功績と御労苦に対し、衷心より感謝と御礼を申し上げます。

森岡校長先生は、昭和二十六年三月、私達と同じ須工を御卒業された同窓の方で、お人柄の立派な、新進気鋭の校長先生です。

森岡先生の御尊父様は、母校第五代校長であられました、森岡貞篤先生です。

このような、大変御縁の深い方をお迎え出来ましたことは、母校は申すまでもなく、同窓会にとりましても誠に有難たく、意義深いものと思います。

森岡校長先生、どうか母校共々同窓会もよろしくお願いいたします。

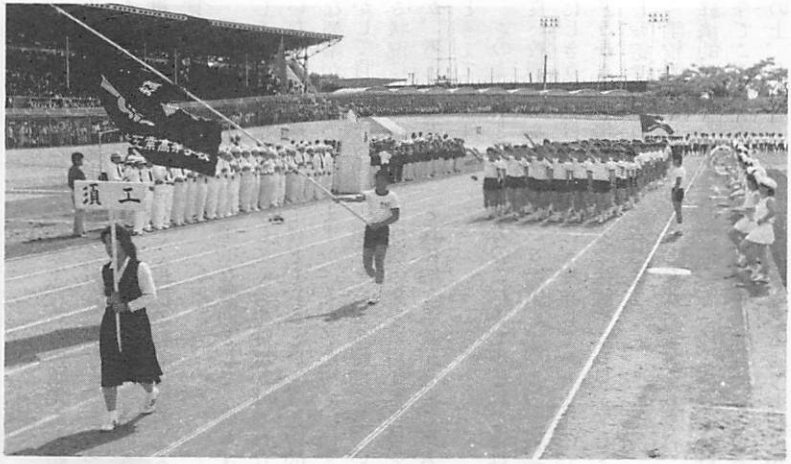
日本経済は、第二次大戦後灰燼の中から立ち上がり、奇跡の復興を成し遂げ、高度経済成長を経て、豊かな成熟社会に入りました。日本の躍進を支えてきたいわゆる日本的経営にも、新たな変化の兆が見えてきたと言われております。この背景には、人口の高齢化、技術革新の加速化による知識や技能や経験の陳腐化、および若い世代を中心とする個人主義個性化への価値感の転換などがあげられています。

しかし、経済は危機を通して発展し前進してゆくと言われています。

母校は、創立五十周年を数年後に控えています。このときに当り、森岡校長先生をお迎え出来ましたことは、母校にとりましても、同窓会にとりましても、誠に有難たいことでございます。

母校も、同窓会も、森岡校長先生を中心に、協力体制を整えながら、発展されますことを心から念願いたします。

最後になりましたが、同窓の皆さんの御幸福と、益々のご活躍をお祈り申し上げます。



ご挨拶

校長　森岡　清

同窓会の皆様方には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

今年春の教員異動によりまして、思いがけもなく母校の校長を拝命し、宮地前校長先生のあとを引き継がせて頂くことになりました。

思い起しますと、昭和二十六年三月に本校機械科を卒業し、その後昭和三十二年から三十八年三月までの六年間教員として奉職させて頂いて以来、今回は二十二年振りの母校でございますが、職務の重大さを考えますとき、心の引き締まる思いがいたしております。

その間におきまして、本校が現在のように発展してきましたのは、一重に各年代においてそれぞれに薫陶を頂いた恩師と仰ぐ多くの先生方や、卒業生の皆さん方、あるいは須崎市を中心とする周囲の皆さん方など、多くの方々の心暖まるご支援ご協力の賜であると心から感謝申し上げております。

特に、その間において、清家会長を中心とする同窓会の発展はめざましいものがあります。恐らく全国的にも、これだけ組織化され、強い絆で結ばれた同窓会は数少ないと申せましょう。

この四月以来、特に七月以降は、卒業生の求人のことで全国各地の企業から人事担当者が来校されまして、その方々のお話しでは、本校の先輩方の優秀な勤務振りと、後輩の世話がよくできることについて口を揃えて報告をされておられます。

また、地元の須崎では、本校に何らかのゆかりのある方にお会いすることが多く、そのたびに本校の歴史の重みをつくづくと感じている次第です。

本校の早期の卒業生の方々は、すでに齢六十歳になろうとされ、社会的地位も高く、人生経験も豊かな領域に入ろうとなされていますし、そうした多くの方々が遠く近く、それぞれのお立場で母校を見守って下さっていることを感じますとき、有難い気持で一ぱいでございます。

学校といたしましては、そうした先輩方の暖かいご支援に甘えることなく立派な社会人になり得る新らしい卒業生を育てるための努力をしなければならないと決意しております。

幸いなことに、前宮地校長先生のご在職中の三年間、表面的にはいろいろとありましたが、内面的には、それらのことを糧として、大変な成長を遂げておりまして、大方の生徒達は須崎工業高校の生徒としての自覚を持ち、規律ある学校生活を送っていると申せます。

その間における宮地校長先生、竹村教頭先生を始めとする在職の先生方のご苦労も大変なものであったと拝察いたしております。私も、そのあとを引き継がせて頂き、全力を尽して母校の発展に努力する覚悟でございます。

現在の工業高校は、全国的な傾向として、必らずしも工業を目指して入学してくる生徒ばかりではないなど、教育環境としてはどちらかといえば否定的な要素が多いのでありますが、そうした中で、何とかして肯定的教育構想の確立を考える時期にきている状況にありまして、生徒達の将来に対する目標とか、考え方など、もっと具体的な示唆が必要であると考えています。

そのようなとき、先輩方のこれまで歩まれた道は良い教訓になると考えている次第です。この会報「にしきうら」は、在校生にも配布しておりますので、どうか人生の指針ともなるご体験やご意見をどしどしお寄せ頂ければ幸いに存じます。

学校のきびしさもさることながら、社会状勢は、経済的にもまた外国貿易の面でも一段ときびしい昨今でございますが、同窓の皆様方には健康にご留意の上、今後とも一層のご発展をなさるようお祈り申し上げます。

また母校のことにつきましても、今後とも相変らぬご支援の程を宜しくお願い申し上げまして、ご挨拶といたします。

須工のますますのご発展を

前校長　宮地恒雄

昭和五十七年四月、須工校長として赴任し、皆様がたに温かく迎えていただき、ありがとうございました。

須崎の地は、私の第二の故郷であります。といいますのも、三十五年前、教員として初めて勤めさせていただいたのが、須崎南中（当時多ノ郷南中）であり、続いて須崎中あわせて六年間お世話になったからであります。

そのため、在任中須工教職員にもPTAにも、限りなく懐かしい当時の教え子たちが多く、また町にもたくさんの知り合いの方がいました。

これらの人々に支えられますとともに、とりわけ清家寛会長をはじめ、同窓会本部役員および各支部の方がたに、本当にお世話様になりました。改めてありがたく厚くお礼申し上げます。

ところが不徳のいたすところ、何ら見るべき教育的成果を挙げ得ず、わずか三年間で須工を去りましたこと、誠に申しわけなく存ずる次第であります。

しかしながら幸い、新校長に頭脳鋭敏、企画力、実践力ともに県下随一の森岡清校長をおむかえしたのであります。

私の不十分であった点を、すべてカバーしてくださるであろうし、これから須工の大躍進時代が期待できますこと、誠にご同慶のいたりでありまして、皆様がたとともに万雷の拍手をおおくりする次第であります。

森岡校長はご案内のとおり須工にとっては、卒業生でありかつ親子二代目の校長であります。

このようなことは、本県高校教育界では寡聞にして、他に例をきかないのであります。意義深く誠におめでとうございます。

この上は、やがて来るべき須工創立五十周年記念にむけての多目的棟建設や寺尾公園への須工跡地の碑建立等が、同窓会のすぐれた組織力による全面的バック・アップのもとに見事に成就せられますことを、心から御期待申し上げる次第であります。

また同時に竹村教頭、渡辺事務長、卒業生教職員を中心とする須工ヤル気集団を、和気あいあいのPTAとともにご援助くださり、須工教育が飛躍的に高まり、ますますご発展されますことをお祈り申し上げます。

（高知小津高等学校長）

学校近況

教頭　竹村義典

昨秋は産業教育制度制定一〇〇年に当る記念事業が県内でも行なわれました。その中で、とでん西武百貨店における産業教育祭には、本校よりも各科が出品参加し、また記念植樹として「センダイヤザクラ」が高知市城西公園に植樹されましたが、本校にも一〇本の配分があり、玄関前と機械科棟裏に植えました。桜の成長と共に、次代を背負う若きエンジニアが次々と巣立ちゆく事を期待します。

今春の卒業生は機械科六八名、造船科一四名、化学工業科一一名、電気科五七名の計一五〇名で、卒業生総数は六二八三名（女子五二名）となりました。そして新入生は二〇五名で、在学総数も段々と定員に近づいております。

人事では、宮地恒雄校長先生が小津高校長へご栄転され、その後任に第一四代校長として森岡清先生（前高知工業高校定時制教頭、母校機械科二六年三月卒業）をお迎えしました。前宮地校長先生は高校教育課長より、ご着任いただき、三年間でしたが、二度の授業放棄事件も起る困難の中で、諸先生方およびPTAの協力を得て、生徒の服装、基本的生活習慣の立直しから始められ、科学文化の急速な発展に対応する工業教育に手腕を発揮され、特に念願の多目的棟建設の緒をつくられ、また大型コンピューターへの更新を実現されました。また同和教育の充実、発展にも率先して尽力され、同和教育部と共に地域よりも評価されております。次に一五年間にわたり電気科および進路指導部長としてお世話になりました高橋宜彦先生、事務職の池田亀喜さん、長い間ご苦労様でした。また同和主任の長山栄雄先生、生徒指導部長の池内千雄先生、化学工業科長の尾崎翹彦先生等も転勤されて残念ですが益々のご活躍とご健勝を祈念し、ご指導いただきましたお礼を申し上げます。

新校長、森岡清先生はご承知の方も多いと思われますが第五代校長、森岡貞篤先生のご令息で、大学卒業後、六年間母校に勤務されており、張切っておられますので、同窓会もよろしくバックアップして下さい。着任の先生方は新進気鋭の方が多い中で、以前に本校にご勤務されたこともあるベテランの社会科、池田進先生、事務職、斉木八重子さんも居られます。

以下、人事異動をご紹介します。

転任

宮地　恒雄（校長）小津高　森岡　清（校長）高知工
村永　秀邦（国）伊野商　岡林　龍明（国）宿毛工
池内　千雄（社）仁淀高　池田　進（社）須崎高
長山　栄雄（〃）県教委　高橋其知子（社）中芸高
西村　茂（英）岡豊高　西　桂子（英）新採
川渕　伸之（体）高知工　塩田　泰愛（体）〃
尾崎　翹彦（化）〃　土居　啓一（化）〃
高橋　宜彦（電）〃　高橋　泰宏（電）新採
池田　亀喜（事）須崎（久）　斉木八重子（事）佐川高

着任

保木　正枝（国）幡多農高　浜田　和生（国）時講
森本民之助（理）大栃高　中村　すみ（理）時講
横田　真一（化）大正高　武地　和男（化）期助
山縣　秀人（機）　西山　廟一（船）助手新採
谷脇　亮平（社英）佐川高

尚、古谷恭啓先生の教諭任用に伴い、岸本典幸先生が機械科へ校内異動となりました。

さて、学校では昭和五十七年度より皆、精勤表彰を行っておりますが、五〇％前後の好成績です。学業成績でも、評価オール5の者が出ました。同クラスに体育のみ4の者も居り、両名共部活動（サッカー）をやっており、将来を期待し、喜んでおります。多目的棟も当局の話題になりだし、コンピューターもレンタルで端末機二〇台付のものに更新されることになりました。

部活動では、ソフトボール部が県体で二年連続全国一位の学芸高を下し初優勝し、全国大会に駒を進めました。それだけに大きな期待がかけられていましたが準々決で赤穂高（兵庫）と対戦、四番打者に三本塁打、六点打を許し、7対5で惜敗。その節は物心両面のご声援どうも有難う存じました。四国大会にも出場しましたが県勢三校の争いとなり三位でした。野球部は春の選抜で中村高を8対6で破り公式戦初勝利、続いて夏の大会では宿毛高を3対1で破り、三四年ぶりの勝星をあげ、校歌が歌われました。ソフトボール部員中、谷岡、山崎、竹下、山本君等は県の国体選抜チームに選ばれています。その他の部も郡体では優勝できるようになりました。

今回は、報告する事が種々あり、嬉しい限りです。皆様方のご発展とご多幸を祈ります。

最近の進路状況について

進路指導部
中山正彦

同窓会の皆様には、ご健康にて御活躍のこととお慶び申し上げます。

日頃は、後輩の就職等に何かとご支援を戴きましてありがとうございます。

扨て、本校生徒の最近の進路状況につきまして簡単に報告いたします。

昨年（五十九年度）は、一部の業種においては景気の回復が見られ、求人も多少増加した事と、又一方においては丙午生れで全国的に生徒数が少なかった事にも助けられ、就職合格率は近年になく良好でございました。

しかし、皆様方御承知のように景気の低迷による就職難OA・FA化の進展による就職難、地元志向が強まったことによる就職など高卒者の就職環境はますます厳しくなっております。

本年度の求人状況を見てみますと、県内では企業訪問の結果、不景気のためすでに数社採用しないとか或いは今年一杯様子を見てみないと採用できるかどうかわからない等の返事を戴き今年は昨年よりも相当求人数が減る見込みで県内就職希望者にとってはますます厳しくなる状況でございます。

従って、ここ二、三年前から止むを得ず県外企業に志望先変更する者が徐々に増える傾向にあります。

現在の求人並びに過去三年間の求人と進路状況は別表(I)(II)のようになっております。

県外企業からの求人は出足も良く、昨年の同時期と比べてみますと二〇数社増えているものの、大手企業での高卒者の採用数が減っており、特に半導体IC LSIの生産事業所、あるいは関連企業においては非常に採用数が減っております。

しかし、本年度も応募、内定状況共に県外企業中心になっており十月二十八日現在の内定者数の、県内外の数字は別表(III)のようになっております。

同窓会各支部の皆様方には、今後益々ご活躍いただきまして、後輩のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

又学校の方へも、種々、お気付きの点など、よろしくお願い申し上げます。

別表(I)　本年度並びに過去3年間の求人状況（会社数）

年度＼地区	関西	大阪	東海	関東	中・四国	県内	計
57	91	130	59	154	45	62	541
58	69	105	35	128	48	64	449
59	68	99	49	124	35	78	453
60	85	92	55	133	31	51	447

60年度の求人は10月28日現在のもの

別表(II)　過去3年間の進路状況

年度	生徒数	進学	就職		未定その他
			県内	県外	
57	174	24	68	69	13
58	168	14	76	74	4
59	151	12	59	76	4

別表(III)　60年度3年生進路希望状況

年度	生徒数	進学希望者	就職希望者		未定その他
			県内	県外	
60	203	22	59 (20)	108 (73)	14

（　　）内の数字は10月28日現在の内定数

京滋支部だより

21機卒
大崎栄郎

私は終戦の翌年に一種機械科を卒業した者です。この度、同期の広瀬理、京滋支部長より、是非何か書いてほしいとの事で「人にこうよと頼まれりゃ、いやとは言えぬ……」でご存じ森の石松ではないが「死ななきゃなおらない」というあれで、つい引き受けてしまい、ホゾをかんでも後の祭りとなりました。

もうこの辺で「大分、毛色の違う奴が出てきたゾ」とお気付きのとおり、機械科出とはいいながら、ヒョンなことからラジオに関心を持ち、次いでトンツーへと変り、それもとうとう陸を食いつめて海上へ脱出するということになり、あれからすでに三十年、船舶通信士としてのアガリで女房子供を養うているという変りダネです。若し全国同窓生の中で、このテのコンクールでもやったら、結構ええとこ、いくんじゃないかと……。

以前は、もっぱら外国航路に出ていましたので、同窓会の御案内を戴いても止むなく欠席ということで、何と、一度も京滋支部の会には出ていません。そういう訳で「支部だより」とは申せ、その方面のネタはゼロですので、全く場違いのものとなりましたこと、おわび申しあげます。

この四・五年は阪神から奄美大島を経て那覇を往復するフェリーに乗船していますので、同窓会のお招きでもあれば出席できるのではと思っています。こんな折に丁度、広瀬氏から「ボツボツ時期を見て集まろうや」との電話を戴き、改めて昭和五十二年度版の会員名簿をくってみました。実は、私は以前は京都市伏見区向島に住んでおり、五十五年十一月に現在の水口町に移ってきました。それ以後この名簿を見るのは今回が初めてです。

京滋在住者を探してみますと、思ったより多数の方々がおいでのようで、中には私共のすぐ近くにも幾人かの方がお勤めらしいことを知り、驚きを新にしました。（しかし、今の所、これ等の方々とのコンタクトはとれていません）

やはり同じ高知県人、それも同じ学校の卒業者ということで、まだ一度もお会いしたこともないのに活字を見ただけでもう、親近感を覚えます。

これだけ多くの方々が、甲子園の高校野球の時には皆が高知勢の応援をしていると思うと、俄かに多くの味方を得たような感じです。

多分、近々に支部長の方から「集まり」のお話があるかと思いますが、その時は一人でも多くの方々とお会いできますよう念願しています。

京滋地区にお住みの皆様、どうぞさそい合わせておいで下さいますようお願い申しあげます。

大阪支部だより

この夏、思いつくまゝに

昭和二十五年 造船科卒業

楠瀬 富万

「みんな元気でやりゆうろう、何をしよるか知らんけんど達者であることは良いことじゃ……」との書き出しで、今年も、吾が須工造船科一期生のクラス会である陸船会から、同窓会の案内状が届いた。

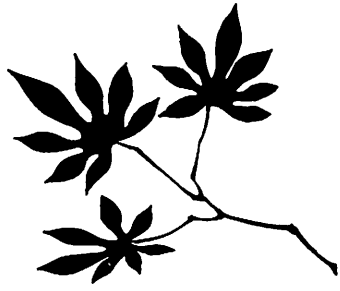
陸船会とは変った名前と思われる方もあるだろうが、その由来は、大戦末期の昭和十九年四月、未来に対して大きな期待性を秘めて、須工造船科に入学、勉学に励んだが、その大半の者が造船に関係のない陸の職業に就いているからである。（幸か不幸か、今なお、造船に携わっているのは私一人であるが）。陸船会も昭和五十五年以来、毎年ふる里の高知市や須崎市で夏に開かれて居る。今年は、横浪三里の横浪荘で七月二十七日に開かれた。今日の陸船会が在るのも、森、福永（在高知）、中川、市川（在須崎）の四名が、恩師の桑原先生（母校の名簿では逝去となっていたが、東京で活躍中の先生を四君が探し出した由）や、散ぢりになった同窓生の消息を根気よく調べ、今日の陸船会が生まれ、連絡事務所を設け、桑原先生ご揮毫の「陸船会」の題字のある会誌も発行されている。いつも、この四君のご努力に感謝している。何はともあれ参加した。（陸船会のお蔭で、毎年墓参りができ、両親の生前に出来なかった親孝行を今している）。今年は恩師の桑原先生ご夫妻が、また毎年出席して頂いている竹村先生を始め多数の同窓生が集まった。

「歳月人を待たず」の諺のとおり、いつの間にか、四十才台も過ぎ、早や五十台半となりつゝある。白髪頭（これはお前が一番だと桑原先生が言っていたが）、薄くなった髪、中には全く無い人も居たがどの顔も同じ五十才台とは、不思議な気がした。

毎年十四、五人が集まるが、いつも新しい顔が居る。今年は糜本君、首藤君に会う事ができた、四十年振りである。もう恋の芽生える年令でもないが、詩情豊かな武名君の口から出る言葉を聞いていると、青春時代の須工生に若返った思いがした。今年は終戦から四十年、一人感慨深い。諸先生、諸先輩への追想、戦時下の防空壕堀り、軍事教練、グラマン機による機銃掃射を受けて逃げた事、大野見村への疎開（終戦の八月十六日に出発したが）、学制改革、校舎の焼失、復学資金獲得のための化粧品や日用品の販売、焼去化された大阪、京都への卒業旅行（確か昭和二十三年だったと記憶しているが）また近況の報告、鮎の友釣りの話しなど、夜の更けるのも忘れて杯を重ねながら語りあかしたが、この情景は言葉でいゝ尽せないものを感じた。また来年も参加したいものである。

しかし、訃報もある。陸船会ができてから二人それ以前に三人の計五人が鬼籍に入っている。陸船会で何時も、ご冥福を祈っている。その他、いろいろの事があった。ユニバーシアード大会、母校の野球部が三十一年振りで予戦で一勝（サンケイ新聞に載っていた）、日航機の墜落、三光汽汽船の倒産など、また私事では、第十五回よさこい会で初優勝（よさこい会は、在阪の須工同窓生のゴルフの親睦グループです）、阪神タイガースの目覚ましい活躍、この秋には七十六年振りに、ハレー彗星もやってくる。

同窓の皆さん、お互いに元気で上を向いて頑張りましょう。



四十年三T近況
（電気通信科だより）

四十年電通卒
田中一郎

同窓会の皆様、お元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。

浅学非才の私に、原稿依頼があり、とりとめのない筆を取る事を最初にお詫びします。

私事になりますが、私達四十年電通卒生十名（内四名は途中採用）が就職した電電公社も、独占の歴史に終止符を打ち、四月一日よりNTT、民間企業として競争の時代に臨んでいます。

加入者からお客さまと呼称一つ取って見ても大きく変わり、私達技術者も全員電話機販売にと、慣れない試行錯誤の連続です。未来を考える人間企業、NTTも可能性を活かした働き甲斐のある職場作りに取り組んでいます。後に続く後輩が少ないのはざんねんですが、最近の政治情勢では無理かも知れませんね。がんばれ須工生！

四十年卒も今年で二十年、昨年末と今夏高知市で同窓会を開いた。恩師田内・秋月両先生を始め十七名が参加し大いに青春？を語り合った。参加者を各ジャンルに分け理由を報告し合った。もっとも昔のままだった人、両先生他三名。もっとも昔と違う奴一名。もっともうれしそうだった奴二名。もっとも神士然としていた奴二名。もっとも金のありそうな奴一名。もっとも喋べった奴二名。もっとも誠実そうな奴二名。もっとも女を泣かせそうな奴二名。もっとも幸福そうな奴一名。もっとものしられた奴一名。そして遠く群馬県で教員をしている友から、恩師に出逢うのはいくつになっても恥ずかしいもの、今でも単位が足りなくて工業を卒業できない夢を時々見る、その時必ず恩師の顔が浮んで来る。「四十にして惑わず」と申されていますが愚生などは、まだまだその心境にはとうてい到達出来ず現世を彷徨致しておりますと筆を取って来た。

同級生渡辺周一君は一昨年三十七才で急逝した。六十年八月二十九日付高知新聞に「友情の遺稿集完成」若き県職員しのび、と報道された彼の遺稿集いずみまさ（彼のペンネーム）から「十二月」

小学六年のとき　父がなく　弟と二人で家業を手
伝わねばならなかった頃　僕はサンタを見た
夕食も終え　四人の兄弟たちは　頭を並べて寝床
に入った　たのしいサンタの話は知っていたが
見たことがないから　本当のことは　解らなかっ
た　朝が早くこいと　身体をビクビクしながら眠
った　ふと目がさめると　四つの袋にお菓子を
分ける　母の後姿が　裸電球のもとにぼんやり見
えた　やっぱり・・・・・　サンタはいないの
だ　――――胸を丸くして眠ろうとした　朝
弟たちは目がさめると　歓声をあげて「おくりも
の」を確かめあっていた　本当のことを知ってい
たが　黙っていた　塩っからいサンタの味を胸に
つつんで

彼は「寒さに震えたものほど、太陽の暖かさを感じる」と感性に生きた須工生を紹介するとともに彼の御冥福をお祈りしたい。

ソフトボール部の1年
（インターハイに出場して）

監督　津野　隆
顧問・コーチ　伊藤　正孝

皆様方すでに御存じの通り本校ソフトボール部は、今年、高知県代表としてインターハイに出場することができました。これも皆様がたのご援助、ご協力のおかげと感謝致しております。また、全国大会出場の際には、多大なご援助をいただきまして誠にありがとうございました。

以下、全国大会の経過も含めまして、この1年の活動を報告させていただきます。

本年度のチームは、現在の3年生5名、2年生7名でスタート致しました。『インターハイ出場』を目標に、『やればできる』を合言葉に、苦しい練習に励んでまいりました。春休みには、県外チームとの試合により技術、精神両面の向上をはかるため参加した関西地区男子ソフトボール研修会において一部リーグ優勝。四月からは新1年生も加わり、春季選手権大会では、準優勝という成績をあげることができました。これらの試合の反省をもとに、土・日曜日も返上しての練習の後に臨んだ県体では、二回戦　追手前高校を10対1、三回戦　大栃高校を4対1、準々決勝　大正高校を2対1、準決勝　安芸高校を5対2で破り、決勝戦に臨みました。対戦相手は2年連続全国制覇を果した強豪高知学芸高校です。2回に1点、3回には2点を取り先行しますがさすが学芸高校、5回に2点を取られ1点差に詰め寄られました。最終回には1打同点のピンチをむかえますが好守備できりぬけ3対2と下し、念願の初優勝を果すことができました。また、これにより十四年ぶりの全国大会の出場権を獲得しました。

徳島県で行なわれた四国大会では、第三位の成績をおさめ、いよいよインターハイです。愛知県刈谷市の合宿の後、開催地石川県金沢市に乗込みました。金沢は、予想外の暑さでしたが、2日間の調整の後試合に臨みました。福井県代表の勝山精華高校戦では、立上がり緊張感からか2点を先行されましたが、4回に小わざをいかして一気に逆転、その後も長打で点を加え7対2と初戦を飾りました。大会2日目の三回戦は熊本県代表の済々黌高校でした。2対2で迎えた6回裏、4安打を集中しての攻撃で3点を追加し5対2で破り、準々決勝へと駒を進めました。

準々決勝、兵庫県代表の赤穂高校との戦いは、2対5とリードされた5回裏、3点を取り同点に追いつきましたが力つき、惜しくも敗れてしまいました。

全国制覇の夢はなりませんでしたが、部員全員が力を出しきる事ができました。この貴重な経験を今後の生活に生かして頑張ってくれる事と思います。

また、国体予選の結果本校から4人の3年生が高知県選抜チームのメンバーに選ばれ、十月二十日からの国体目指して高知商業での合同練習に励んでおり、きっと期待に応えてくれると思います。

さて、ソフトボール部の現状ですが、2年生7名、1年生9名の計16名での新チーム作りに励んでいます。まだまだ課題も多いのですが、インターハイ経験者も残っており、再び来年のインターハイを目指して毎日練習に頑張っています。

また、勝負のみではなく、挨拶などの礼儀や、団体競技を通じての規律やチームワークなどの人間的な成長も重視し、輝かしい伝統を誇る本校ソフトボール部として恥かしくないように努力したいと思います。

今後とも他クラブ同様、皆様方の暖かいご声援をお願い致します。

三十四年ぶりの勝利

野球部監督　吉本　伸

部復活以来六年目を迎えた本校野球部の昨年一年間の活動状況をお知らせします。

夏の大会が終り、読売旗争奪の選抜大会に出場するために、ベスト十六の出場権をかけ、八月九日に宇佐分校と対戦し、八回まで三対五で苦戦していましたが、土壇場の九回三安打と敵失とを絡め、三点を奪い六対五で逆転勝ちをおさめました。八月二十六日には、選抜甲子園優勝の伊野商と対戦し、七回九対一コールドゲームで敗れました。

十一月三日、秋季四国大会県予選では、清水高と対戦し、三点を先行された五回、小野（朝ケ丘）の二塁打を足場に一点を返し、反撃ムードを作り、後半へ望みをつなぎましたが、七回一点を追加され、四対一で、惜敗いたしました。やはり力負けであり、この経験を生かして、冬の間は、例年より増して、基礎体力、筋力トレーニングに力を入れ、春を目指して頑張り続けました。

年が明けた三月三十一日、春季四国大会予選が行なわれ、中村高（夏ベスト4）と対戦し、浜口（朝ケ丘）、中尾（須崎）の両投手の踏んばりで、内容の濃いゲームでありました。一・二回で四点を先行しましたが、四・五回に五点奪われ逆転、六回一点を入れ同点となり、七回二点、九回だめ押しの1点を入れ、結局、八対六で勝利することができました。一勝に執念を燃やした結果、部復活以来、公式戦初勝利をおさめ、一つの壁を突破することができ、大変嬉しく、自信を深めました。が、二回戦、追手前戦に十一対二で完敗致しました。

五月二十五日県体が行なわれ、強敵高知高（ベスト4）と一回戦で対戦し九対二で敗れました。

七月二十日より夏の選手権大会が始まり、一回戦は、宿毛高と対戦し、二回に先頭打者中居（須崎）右前打、続く岡崎（上分）犠打の一死後、北川（須崎）の中前打で先制し、五回松田（土佐南）の右翼頭上を越える三塁打、渡辺（佐川）遊撃失策でチャンスをつかみ、一死後、関（土佐南）のスクイズで追加点、七回には、松田二塁打、渡辺犠打の一死三塁で、浜口（朝ケ丘）右中間二塁打で追加点をあげ、勝利を決定づけました。中居投手も七回までよく好投しましたが、八回一点を取られ、二死二、三塁で関にスイッチし後続を断ち、三対一で勝利することができました。昭和二十四年に対中村高と三対一で勝利をおさめて以来、三十四年ぶり、夏の大会は初勝利をすることができ、チーム全体やればできると再度自信を深め、二回戦、明徳高と臨みました。結果は十一対四で敗れはしましたが、前半は一進一退の攻防であった、よく善戦したと思います。

夏の大会も終り、新チームを結成し、旧チームで得た自信をバネに、毎日七時頃まで練習に明け暮れ頑張っています。秋季大会が十一月二日より行なわれますので、何とぞ、御支援、御声援をよろしくお願い致します。

昭和59年度決算報告書

60. 3. 31

	費目	金額(円)	摘要
収入の部	前年度繰越金	118,315	
	入会金	426,000	2,000円×213名
	特別会計利息	681,760	農協 658,760　四銀 23,000
	雑収入	8,414	普通預金利息・名簿代他
	仮受金	11,857	年会費他
	計	1,246,346	
支出の部	会議費	9,000	理事会
	事業費	654,000	開校記念品代　52,500 会報発行費他　581,900 調査費　19,600
	通信交通費	82,170	電話代・切手代・旅費他
	事務消耗品費	15,888	コピー代他
	慶弔費	90,350	卒業証書丸筒他
	支部配分金	214,200	関東21,800　中京15,000　近畿40,400 高知53,200　須崎77,200　幡多 6,600
	雑費	12,620	振替払込料他
	計	1,078,228	

入出残
1,246,346円－1,078,228円＝168,118円

〈特別会計〉

	費目	金額(円)	摘要
終身会費	前年度末積立額	15,000,000	
	本年度納入額	1,770,000	新卒1,330,000　旧卒440,000
	計	16,770,000	

昭和59年度会計事務について

諸帳簿及び証書類等により監査の結果金額その他については相違なく、預金通帳・定期預金証書とも確実に管理適正に執行されている。

昭和60年6月5日

監査　下元征夫 ㊞
〃　武内徳雄 ㊞

昭和60年度予算

	費目	金額(円)	摘要
収入の部	前年度繰越金	168,118	
	入会金	410,000	2,000円×205名
	特別会計利息	690,000	農協668,000　四銀22,000
	雑収入	5,000	
	計	1,273,118	
支出の部	会議費	30,000	
	事業費	742,500	開校記念品代　52,500 会報印刷代　340,000 送料　260,000 振替用紙　15,000 封筒（印刷含）　30,000 調査費　25,000 写真代　20,000
	通信交通費	80,000	切手代・通話料・その他
	事務消耗費	30,000	コピー代その他
	慶弔費	100,000	
	支部配分金	258,800	関東25,400　中京17,000　近畿48,600 高知69,800　須崎90,400　幡多 7,600
	雑費	20,000	振替払込料その他
	予備費	11,818	
	計	1,273,118	

〈特別会計〉

	費目	金額(円)	摘要
終身会費	前年度末積立額	16,770,000	
	本年度納入目標額	2,000,000	
	計	18,770,000	

終身会費納入者名

昭和六十年十月二十八日現在

昭和十八年
中平　万年
田辺　博造
橋本　忠行
矢野　亀雄
西川　嘉明
木下普二郎
坂本　忠男
田村　耕吉
竹村　昌孝
高橋　巌
中岡　当明
広田　四郎
清家　寛
長山　象一
山中　幸樹
山田　弘市
海地　清幸
前田　托造
渡辺康太郎
門田　正猛
下村　暗宏
島崎　憲一
平井寿之進

昭和二十年
矢野　象一
松本　興雄
竹下　増秀
梅原　健一
広瀬　兼男
横畠　元幸
宮本　清
国広　慶助
小松　章洋
井口　治郎
梅原　務
中越　貴行
清藤　良徳
池上　葛男
片岡　孝人
浜田　善三
堅田　速雄
片岡弥太郎
浜口　義夫
甲藤　茂
張　泗海
近森　和夫
片岡　命長

田所　定夫
吉岡　豊延
広瀬　孔建
梅原　康一
岩山　安成
山崎　義亀
大野　純輔
北添　健児
梶原　誠幸
下元　逸志
武内　昌良
宮本　悟
坂本　正昭
遠藤源二郎
細木　坦
広瀬　昭一
味元　三夫
田所　三男
野本　則昌
高橋　忠
寺田　郁雄
吉村　功

松沢　真三
山田　豊
大川内　厳
柏井　秀有
亀山　和夫
小谷　浩三
渋谷　邦治
笹岡　勲
刈谷　雅幸
戸梶　茂富
森下　桂郎
中平　徳喜
大崎　栄郎
楠本　正昭
島崎　馨
谷　芳樹
山中　正義
岡崎　範夫
森下　春茂
大藤　益富
広瀬　理
川添　泉
岡村　嘉夫
宮崎　昭男

昭和二十一年

昭和二十二年
堀渕　健三
浜田　俊一
藤戸　進
金子　昭平
西森　雄蔵
川越　義雄
上東　佐吉
市川　泰輔
和田　富夫
岡林　縣市
岡添　家達
岡林　民夫
谷脇　正造
島崎　良一
高橋　繁徳
川村　義隆
古谷　義幸
片田　彰
谷口　和夫
高橋　典男
山中　繁
国枝　幸治
武内　徳雄
吉本　静夫
野瀬　勇
竹内　正一
島崎　茂
岡田　信雄
吉村　春政
吉川　貞造

昭和二十三年

昭和二十四年
北川　良輔
下村　昇
奥代　重恭
鍋島　惟孝
竹村　典和
谷　武男
上岡　親雄
傍士　忠義
王子　和雄
古谷　正一
大崎　晢
川村　実
徳広　善三
松浦　定雄
中平　利夫
堅田　雄男
福島　孝臣
堀内　昭佑
森　久敬
梅下　和男

昭和二十五年
藤本　幸造
楠瀬　富万
竹内　良一
高岡　正幸
横田　雅範
福永徳七郎
西森　勇
矢野　定志
津野　秀男
来女　東作
武石　英男
横山　三郎
岡村　充喜
田井　利暁
橋田　正喜
堅田　耕勇
横山　豊一
加藤美代治
梅原　溢男
島岡　音喜
須内　鹿雄
大原　恒夫
坂本　臣三
横田　晴光
秋沢　英男
池　速水
北川　万
西内　豊
大崎　静幸
浜田　惣助
近森　久重
上田　泰正
大野　幹雄
高野寿恵広
長山　貞雄
武政　良男
汲田　正一
森岡　淳
岡田　恵
山崎　一水
塚本　拓雄
多田　市彦
汲田　信男
中野　義則
竹村　寿範
市川　栄
垣内　好士
松浦　浩造
中村　稔
田中　穣作

昭和二十六年
西田　浩造
森岡　清

昭和二十七年
福岡　昭七
森田　泰男
井上　健弘
堀見　和三
川村　忠孝
中嶋　孝良
三本　正勝
藤田昭八郎
伊藤　孝由
田上　圭助
津野　嘉三
斧山　光男
田中　良平
金子　芳夫
前田　耕一
前田　重男
山崎　定徳

昭和二十八年
田村士津夫
岡林　幸保
梅原　弘志
横川　寛水
市川　昌男
末松　弥助
横山　憲吉
谷本　功

昭和二十九年
田村　泰雄
田村　武夫
若瀬　竜雄
中　聖徳
中川　秀市
竹下　哲男
古味　忠孝
上田　智明
橋本　盛幸
北村　靖
松本　忠雄
矢野　勝郎
横山　清幸
浜　好宏
山崎　富男
谷　博之

昭和三十年
中野　義明
吉村　正策
長　信仁
上田　善右
武政　博明
野並　充温
矢野　保照
江渕　俊明
上田　浩倶

高野 照男
西森 行雄
渡辺慈太郎
岡本順次郎
戸田 修史
安並 利益
角西 信義
横山 傅
竹内 稔
西森 幸雄
矢野 晴英
坂井 瞭
田所 松正
細木 芳文
松田 豊

昭和三十一年

正延 善彦
奥田 光男
川渕 芳秀
藤田 国基
谷 満洲男
吉田 遊亀
畠中 光一
三浦 裕礼
浮田 国広
宮本恵美子
小野 邦夫

高橋 英雄
浜口 正憲
安井 壮三
浜口 一
鍋島 武彦
野島 宥助
信高 健一
山口 利一
市川 隆康
下元 直正
田中 章介
高橋淳二朗
佐藤 岸夫
岡添 光彦
渡辺 泰信
山下 英作

昭和三十二年

高橋 三雄
植田 幸子
松村 崇史
中西 安男
植村 豊樹
塩見 崇敬
窪田 邦彦
松下 留吉
三宅 世起
二見 政雄

大崎 光春
二宮 安雄
三本 和男
松村 朱美
在木 忠正
宮崎 英雄
福井 繁次
弘田 貞夫
斉藤 祐一
矢野親一郎
小原 博信
岩本 和子
梅原 道夫
岡林 博章
佐々木睿喜
柳瀬 忠勝
木村 諭
松井 捷輔
橋田一三六
千頭 英喜
北添 栄

昭和三十三年

山崎 吉広
竹村 元宏
西村 仁利
田村 巍弘
沖本 毅

堅田 隆幸
弘松 章志
氏原 和弘
西森 寿彦
市川 精亮
江口 長敏
西森 昌身
福井 幸正
菅野 佳紀
中村 早夫
中川 勝
柳本 正一
西川 嘉昭
山下 幸三
豊島 昌男
佐々木利昌
高橋 昇
大崎 正導
橋田 昌和
中山賀一郎
岡田 慶助
中川 浄
竹内 淳悟
島岡 栄夫
大窪 英稲
明神 任則

昭和三十四年

橋田 宏
田村 忠隆
岡本 皓男
岡 宏
光原 哲雄
山崎 次男
武森 幸利
高橋 照之
中平 俊郎
竹崎 伸一
鎌倉 彰
横田 雅敏
西森 研策
中平 泰弘
増田 浩
市原 靖彦
吉村 淳一
尾崎 亘宏
中川栄一郎
石川 宏哉
松浦 政志
福富 正香
東 喜一
中村 順暘
田村 祥平
浜口 博至

昭和三十五年

山本 毓二
堀田 洋介
梅原 郁男
刈谷 茂正
山崎 康夫
大原 勉
鎌倉 政清
小室 貞夫
高橋 勲
渡辺 寿彦
津野 昌英
山中 重利
竹村 精史
中平 憲英
山崎 之彦
吉村 忠士
大崎 健夫

昭和三十六年

下川原 章
千頭 且典
田村 賢児
藤田 和明
竹崎 耕作
下元 征夫
宮脇 功
田村 義幸
田村 一利
奥代 一士
市川 泰志
安井 修
白石 忠臣
前田 憲男
市川 映宏
岡林 謙
山崎 忠雄

昭和三十七年

中村 正博
村上 義栄
島津 公夫
滑水 繁雄
岡崎 伸高
上岡 利夫
西森 楯夫
江口 文夫

竹内 正英
光原 直巳
植田 寿一
福井 通
上野 一男
梅下 弘育
野瀬 皓二
友永 詔三
土本 豊

昭和三十八年

島崎 武男
橋本 勝利
中城 一人
竹村 宏文
上岡 照雄
川渕 輝夫
西森 武光
鬼頭 三男
中岡 敬博
田野 茂光
豊田 悟
矢野 範幸
中平 茂明
福井 三男
大崎 秀夫

山本 勝喜
苅部 幸子
井上 耿介
小畠 康弘
岡林 敏雄
西川 政子
市川 公博
河野 英通
沖 良二
長尾 雄司
下元 道弘

昭和三十九年

小笠原郁夫
松浦 茂彦
吉野 益世
市川 正三

大崎 豊明
久川 章
片岡 正利
浜崎 満良
高橋 哲夫
内岡 肇
前田 文雄
新田 和男
石黒 明洋
崎山弘太郎
浜口 博
野村 直信
合田 元宏
岡 弘
森沢 文男
真辺 晃
松浦 正
上田 康文
市川 文雄
津野 隆
木村 正雄

昭和四十年

昭和四十一年

正木 長生
渡辺 正俊
長谷部俊夫
池田 達雄
玉川 良一
岡林 隆
西森 英夫
笹本 充範
在木 勇
山本 照幸
森 正彦
中村 徳文
田村 和嘉
山下 忠男
鈴木 栄
梅原 康男
黒岩 幸生
池 徹
竹内 正男
田村 正志
邑田 善之
下八川哲三
小松 義治
田村 司
岡村 正雄
中居 一郎
真辺 義春

昭和四十二年

吉本　順一
笹岡　正俊

昭和四十三年

竹崎　貞男
池田　収一
西森　広利
下元　栄治
高木　良介
山下　博
山本壮一郎
谷岡　直三
金子　誠
味元　俊一
広瀬　直記
今仲　六男
片岡　幸広
真辺　修

昭和四十四年

西森　房司
下元　彰
松浦　育男
中野　正人
高橋　保雄
玉川喜久夫
石村　秋実
西森　英一
山本　修

昭和四十五年

下谷　吉和
小野　道明
岡村　謙治
横畠　弘明
野島　鶴一
山本　道明

昭和四十六年

片岡　福彦
岡本　直美
中屋　保
箭野　文明
山崎　敏夫
黒石　明義
小田　道男
栄　正彦
佐竹　節男
横山　舜彦
橋田　辰巳
蛭子　淳司
佐々木義信
小野　豊
中野　正興
古谷　好文

梅原　正博

昭和四十八年

小田原孝幸
和田　拓夫
西山　庸一
堅田　蓉幸
広瀬　健三
出来　宏幸
井上　文男
前野　秀忠
三宮　幸弘
谷脇　清次
田村　安男
橋田　洋二
森田　賢一
中井富士夫
石本　正士
浜田　信男
森下　章博
黒田　一福
古谷　恭啓
近森　裕司
氏原　健一
大塚　厳

吉岡　宏海

昭和五十年

中城　鉄夫
篠原　晴夫
仲村　茂博
村田　徳治
安岡　浩三
吉田　安明
上田　憲良
田村　正
中野　友喜
竹崎　実
中城　定晴

昭和五十一年

林　順一郎
大崎　昌則
岡　知秀
岡田　益穂
川上　徳男
西村　嘉泰
宮脇　潤正
谷岡　孝也
西村　豪
松本　晃
柳瀬　幸宏

川村　健次
下元　喜行
高橋　豊
西森　新市
松岡　貴也
丸岡　俊一
石川　早男
中屋　忠
西村　信之
浜口　順一
田部　伸彦
大崎　孝広
小野三千雄
小野川浩史
新改　一富
西田太喜夫
森光　輝夫
山下　一夫
市原　正浩
岡田　郁夫
小橋　啓亮
遠山　正司
中山　安亀
山岸　孝益
山下　任陽
藤田　友二
橋田　哲臣
海地　篤

昭和五十二年

橋田　春男
池田　幸夫
門田　昭二
芝　高広
川村　公孝
池田　和正
関　泰平
土木　雅人
永原正一郎
山中　憲一
吉岡　利尚
久万　道夫
嶋崎富三男
明神　直昭
井上　浩
川村喜一郎
北沢　文広
国沢　成雄
野島　勝行
浜田　清志
政岡　勝
山崎　浩一
吉本　一仁
山中　栄
高鴨　覚
藤岡　大成

昭和五十三年

式地　秀明
藤田　英雄
片山　幸広
山中　光典
北添　俊広
中野　俊彦
中沢　和明
森崎　淳二
桑原　真一
松本　健次
山崎　晋司
大野　孝雄
大崎　広明
坂井　民夫
川上　正雄
林　稲男
細木　新
岡添　慎一
宮地　亮佐
種田　裕二
北添　裕生
山崎　明
岡田　知久
片岡　広明
堅田　裕一
田中　正博
山本　義仁
足達　昭一

片岡　幸彦
宮谷　文雄
安並　朋宏
浜田　壮介
門田　幸久
小野山慎一
西本　勲
山添　岳広
岡崎　崇文
川西　耕二
又川久仁夫
松本　伸二
明神　裕和
楠瀬　聡
高橋　望
奥田　和久
久岡　輝男
朝日　幸年
橋詰　学
広畑　浩幸
津野　修
明神　正文
南部　洋稔
芝　由喜
福井　哲人
明神　達也
堅田　浩二
山崎　清

高橋　孝平
岡本　広之
中原　明雄
海治　和男
長山　勝彦
斧山　喬
間嶋　和久
嶋崎　勉
大崎　幸雄
岡崎　明
浜口　修司
尾崎　保雄
浜　正人
岡村　賢作
市川　清郎
柏井　啓助
乾　幸一
岡林　博幸
森光　出
山崎　幸利
岡山　計宏
片岡　雄児
保木　利也
奥崎　秀次
江渕　功一
大崎　好一
西岡　三明
竹林　一雄

西村　裕友
吉川　修
岡村　徹
浜田　俊次
高橋　清
森光　孝雄
高橋　清助
松尾　満
山本矢澄志
山口　寿
井上　健一
大原　祐二
矢野　勝俊
浜田　勝章
山添　勇一
小松　和弘
弘田　耕一
武内　秀樹
片岡　孝憲
宮崎　さよ
佐々木敏幸
山崎　優
馬場　宣光
馬場　俊光
谷脇　直人
田所　久善
隅田　仁
竹内一二三

市川 隆弘
田中 彰
渡辺 明
三井 修
岡林 幸治
山崎 稔
田中 健喜
森光 俊彦

昭和五十四年

朝比奈祐介
安藤 輝美
今橋 秀広
大崎 賢二
大原 英二
坂本 定浩
佐竹 利也
佐竹 義敦
田辺 金造
道家 保次
徳広 明良
南部 和寿
間 雄二
浜口 芳文
林 智一
林 弘茂
広瀬 永正
松浦 栄彦

宮崎 秀徳
森下 浩明
森光 公浩
吉本 忠則
市川 敦志
井上 健一
梅原 俊男
堅田 和博
門田 英二
川沢のり子
島崎 信一
柴 叔伯
田上 重浩
長門 和宏
中村由起夫
鍋島 一弘
西森 幸二
西村 文広
橋田 典久
林 伸一
堀川 修一
前田 充由
松本 勝
芝崎 裕二
刈谷 俊英
松坂 功二
松浦 伸人
広瀬 謙二
松元 志郎
森光須賀男
山口 司
山崎 正広
島崎 剛
植田 孝成

植田 正徳
馬詰 博司
梅原 弘
梅原 本自
戎井 良裕
大川内 稔
奥崎 信夫
尾崎 浩助
片岡 晴登
坂本 博
高橋 強
高橋 信好
谷口 久則
谷脇 徳一
津野 光男
戸梶 浩伸
中越 隆男
浜田 俊彦
林 美利
堅田 浩司
小野 利耕
北村 幸浩
笹岡 義男
裕二
須内 貢
竹内 智昭
谷 倡弥
田部 貴久
中田 正造
長山 孝文

桑瀬 正通
笹岡 幹男
高橋 利男
谷中 久良
田村 倡行
辻本 真司
中岡 朗徳
中野 孝雄
長山 弘行
西地 繁広
松田 靖弘
矢野 宝宏
山本 義文
上田 育生
衣斐 則彦
大野 一宏
小野 利耕
堅田 浩司
柳本 孝広
山川 心一
沖吉 孝文
刈谷 俊英
背木 伸二
背木 富雄
麻田 正志
井関 直道

長山 基
西田 浩
松浦 定男
松田 俊市
明神 孝郎
森 一彦
吉田 智欣
石田 典久
岡本 光弘
堅田 孝光
佐藤 和也
高橋 広志
竹内 優
田中登美夫
田村 一彦
中谷 智行
中村 澄夫
西 元秀
浜崎 敏夫
浜田 幸一
広瀬 幸男
松浦 伸人
松坂 功二
溝渕 健夫
宮脇靖一郎
森田 一宏
山崎 保
山本 重光

伊藤 広幸
大崎 信彦
尾崎 明彦
甲藤 章人
酒井 則彦
三宮 隆
柴 広信
高橋 唯夫
高野 幸夫
谷脇 一仁
近沢 章友
辻 安得
中山 茂
長山 誠
西森 治夫
西森 博章
能見 清志
野島 栄生
西森 徳幸
梨 千春
長山 勇
中田 勝利
辻本 隆裕
高野 浩二
高橋 秀一
高木 正充
下元 淳史
桑原 智
佐々木義晴
国沢 悟
刈谷 和彦
片岡 博祐
沖 守
大崎 稔
吉岡真佐人
渡辺 敏幸

矢野 健二
横山 智英
渡辺 邦博
石田 道良
今橋 広高
植村 秀幸
下元 寿夫
高橋 祐司
西村 公一
西森 寿亀
弘瀬 富成
溝渕 建志
森 裕
山岡 正人
山下 真司
山脇 忠司
大川 豊
小田 忠志
織田 修蔵
黒原 靖彦
中内 正知
藤本 修
松浦 貴彦
松田 典久
松本 正広
森下 昭仁
八木 俊介
市川 和男

大崎 幸一
大崎 始
大野 造
岡 弘明
岡村 三男
尾崎 義喜
片岡 弘幸
木下 譲二
楠目 満
近藤 寿昭
酒井 隆
坂本 卓
竹内 信
竹田 宗市
田村 明彦
中山 浩至
橋田 道明
浜田 和典
浜田 幸俊
久岡 孝善
細川 源井
山崎 和久
山下 和已
岩佐 敏弘
大崎 真一
会所 辰男
門脇 一昭
津野 孝司

中平 昇
中脇 兄志
浜田 光啓
久原 三生
壬生 一光
明神 良房
広瀬 和弘
山本 順一
中村 一也
宮本 淳一

昭和五十六年

背山 寿行
麻岡 雄介
今城 秀和
大崎 正二
岡林 靖
酒井 悟
笹岡 巌
笹岡 義人
高橋 賢治
高橋 隆彦
竹村 勇政
武吉 秀文
谷脇 政喜
道家 丈典
徳広 和則
中内 光親

中村 智彦　西森 健一　竹内 利夫
中山 則夫　野本 博文　谷 隆宏
仁尾 常洋　橋田 信一　田村 隆憲
西森 忠広　浜口 弘　藤原 和雄
橋田 孝幸　細木 正仁　毛利 圭志
長谷川 隆　松本 健三　吉村 喜富
堀部 正一　宮崎 信一　小西 完司
松尾 靖浩　宮地 二男　岩崎 孝明
松本 誠二　明神 隆志　大石 高志
水口 広幸　森 泰信　堅田 良一
森田 和幸　森沢 宗幸　川上 稔明
山下 学　森本 一久　坂元 行広
吉門 英喜　川渕 章　笹岡 敬助
出間 文男　山崎 敏弘　佐々木由紀男
入交 昭典　山下 正一　沢村 俊二
片岡 宗温　依光 広悦　下元 丈児
笹岡 久稔　岡崎 光臣　高橋 京三
下元 安弘　楠岡 章弘　津野 敦
白木 賢二　小田 浩司　寺田 栄二
高橋 義浩　下元 貞　中畠 益男
竹崎 裕　田中 誠治　中平 隆雄
武市 恵介　西川 敏久　中村 泰彦
田村 英之　政岡 幸喜　西村 浩二
戸田 雅彦　味元 賢一　野島 景介
中 剛彦　山本 浩士　橋田 敏春
中屋 隆　市川 真貴　林 憲之
南部 孝之　尾崎 達也　福本 祥
西村 太志　斉藤 直文　松田 昌士

昭和五十七年

真鍋 斉　斧 秀一　吉門 栄二
森 和彦　片岡 徹　井上 真一
山岡 久二　堅田 勇　小島 和宏
山崎 幹夫　川重 隆博　片岡 一彦
大西 隆晃　楠瀬 英明　川上 黙
奥田 裕二　酒井 俊彦　岸本 明夫
楠瀬 幸則　笹岡 伸雄　近藤 時仁
内 孝志　高橋 範記　坂本 健司
坂口 進　田島 正彦　笹岡 康志
田井 厚志　谷 和史　三宮 一起
高橋 秀典　谷 利彦　下元 文男
竹内 宏充　谷脇 賢二　遠山 昭洋
中平 英児　田元 清昭　中沢 忠義
橋本 孝　土居 隆　中村 正文
広瀬 英仁　鶴島 孝典　西村 幸男
堀 錠二　永原 貢盛　西森 一嘉
松田 善仁　中脇 三隆　浜野 寛樹
中山 民雄　西森 浩二　弘田 拓磨
西森 弘　藤原 敏郎　藤田 浩二
野村 明久　丸岡 隆雄　森光 倡雄
浜口 哲也　味元 博史　宮谷 秀彰
古谷 広明　森 章　矢野 昌道
明神 正徳　森下 直哉　山下 修
森田 兼司　楠岡 一人　笹岡 英樹
山岡 英樹　森光 倡雄　坂本 博幸
山崎 良浩　矢野 雅平　多田 郁夫
矢野 洋史　山下 国己　桑原 正

山中 祐治　千崎 敏司　谷脇 擁一
山本 勲　田中 英雄　中嶋 和之
横山 郁夫　谷 浩司　中田 康洋
大野 正明　谷岡 広幸　西川 裕之
岡村 望　田村 光徳　西森 仁
片山 裕孝　寺村 篤　西森 工
北村 金徳　戸田 吉孝　浜中 一彦
国友 勉　奈路 道程　久岡 民也
楠瀬 博久　野島 幸浩　藤原 和夫
渋谷 舜一　広田 俊二　渕山 祐介
高橋 直也　藤本理理子　松岡 幸陽
谷口 勝廣　前川 信二　丸岡 理貞
戸田 佳彦　松本 正進　三本憲一郎
中平 敦男　村上 政史　森田 茂
橋田 忠徳　山崎 清　森本 成男
藤田 稔　山中 浩明　山岡 秀男
松村 浩二　横山 博一　山崎 雅文
宮地 聖　江西 斉　吉井 省二
宮本 利郎　大川 洋央　和田 浩之
森木 浩文　岡崎 修幸　上田 和正
森光 幸治　奥崎 哲也　安藤 俊一
安並 仁　尾崎 隆二　梅木 孝浩
矢野 昌道　川島 雄成　大崎 典成
山下 修　坂本 博幸　小田 彰仁
楠岡 一人　笹岡 英樹　岡崎 二仁
堅田 幸次　下元 繁男　岡村 弘幸
堅田 雅広　谷本 浩統　川村 和宏

楠瀬 政和　桑原 増広　小泉 智靖
桑原 幸男　高岡 幸広　谷 幸
谷脇 修　津野 晃　西川 保男
西森 勇志　西村 博文　浜口 賢一
原田 浩文　浜田 恒広　福永 靖之
福原 靖幸　藤崎 新一　堀部 明弘
松田 寿久　松本 明人　宮尾 竜生
明神 利則　森本 賢生　結城 伸二
芳川 演之

昭和五十八年

市川 泰彦

今橋　清臣　吉田　靖　横山　和是　弘田　健也　浜町　成人　津野　博文　長野　修　下八川健一　濱田　篤　松本　剛
伊与木孝司　池田　浩二　渡辺　昌光　真辺　博一　保木　豊　中沢　定二　西森　卓也　高橋　裕行　松岡　哲由　山崎　智志
岡村　耕平　石川　浩章　秋本　修身　森光　一弥　水田　孝明　中村　英助　浜崎　喜仁　竹田　敏幸　坂本　伸彦　山中　宜孝
大崎　正弘　市川　昌孝　岩崎　博美　横山　恵司　三本　正男　中山　功司　濱田　耕一　谷口　敏　宵木　雄二　吉野　秀一
大妻　康二　梅原　博之　門田　克彦　渡辺　伸二　森田　政夫　野村　浩明　久岡　三徳　石川太生雄　正剛
大野　二男　尾野　晃彦　久保地啓介　足利　和雄　森田　雅史　長谷川福弘　広瀬　剛　市川　英明　石川　忠司
大森　学　大崎　文章　国本　高弘　在木　正光　森光　清忠　浜田　誠人　藤原　和人　井上　博文　市川　卓水
楠瀬　一明　片岡　健児　倉橋　幸次　伊尾木彰慈　柳瀬　章信　浜村　忠士　正木　定　中山　博幸　岡崎　雄一　市原　浩幸
楠瀬　繁明　鎌倉　由宜　斉藤　敏明　池田　良夫　吉岡　伸仁　山口　舜喜　増本　克史　西森　斉　岡林　孝行　今原　隆二
国広　正信　楠瀬　章広　高橋　浩幸　市川　富章　石井　洋　山本　時男　松岡　雅勝　浜口　弘行　奥野　淳一　岩川　真澄
高橋　一寛　桑原　秀行　田村　雅忠　井上　隆　石本　司　山本　勇助　美島　隆二　原　賢也　小嶋　利広　柚原　則文
竹内　佳身　佐々木志郎　二宮　英俊　岩本　孝幸　猪野　譲　松坂　幸宏　宮地　明　藤沢　守人　片岡　一郎　大崎　真一
津野　善博　三宮　浩嗣　橋田　覚　植田　栄之　岡崎　隆生　吉門　正元　森田　宏明　二見　浩　久万　陽介　肉林　昭二
丁野栄二郎　下元　健　林　勝也　大崎　健央　刈谷　誠　山本　優二　森本　達雄　古谷　明彦　古島　孝幸　奥代　一也
中平　幹雄　関本　靖　山崎　貴正　小谷　健児　菊地　宏　橋本　柳野　伸郎　正木　勇一　小松　好彦　桑原　丈司
長山　庄作　高橋　義明　片田　秀孝　川田　和久　国広　典嗣　横畠　功起　森田　正利　菅野　勇人　高橋　昌孝　三宮　正裕
浜町　忠文　高橋　国広　上北　達也　北川　雅彦　桑名　勇人　笹岡　覚　安藤　博貴　山崎　義久　森部　真介　白木　昭二
藤田　俊裕　竹内　慶三　北村　修　木下　孝二　笹岡　覚　石元　倫忠　横山　康生　横田　明　石元　良明　瀧平　貞行　谷岡　洋一
牧野　央　竹内　英雄　国広　昌平　楠目　勝己　下元　賢司　梅原　幸雄　大野　明　岡林　幸一　大西　秀明　谷口　聖司　谷脇　弘一
政岡　広宣　武田　幸男　古味　優司　笹岡　紀雄　高橋　清広　江崎　和仁　岡平　一意　織田　薫　大西　博之　戸梶　高広　寺村　春彦　戸梶　久雄
松山　哲雄　田中　雄二　竹内　和広　白木　嘉彦　田上　広明　岡林　春仁　小野　秋広　岡崎　平　中山　幸広　西村　光明
明神　忠男　戸梶　正和　遠山　公明　竹下　正　竹嶋　啓介　岡村　庄二　片岡　和教　川田　浩　濱口　洋一　西山　功一
本木　謙二　徳広　重太　戸田　一伸　谷岡　聴史　竹林　利一　加持　真人　北添　司　中越　雅夫　平井　浩二　野本　等
森田　宏明　南部　知久　中川　啓介　奈路　栄一　竹本　義郎　片岡　正人　久保　陽一　中平　祐成　福原　雄一　濱口　幸雄
矢野　忠則　前田　隆志　中越　将仁　仁木　民雄　谷岡　俊治　川田　浩幸　桜木　雅弘　森田　芳和　藤本　理　濱田　高徳
山崎　輝男　政岡　慎二　野島　涼助　西村　公男　谷岡　哲也　北添　寛　芝　睦夫　横山　豊　前田　司　浜町　舜治
山本　健一　森田　浩司　野瀬　剛　西村　俊一　谷脇　定夫　小田　倫弘　下元　紀夫　中畠　浩行　松岡　孝浩　古谷　博幸
吉岡　淳　柳瀬　信幸　浜田　寿男　羽方　英一　田村　篤彦　高橋　義彦　松田　雅和

昭和五十九年

正木　元和　名川　長康　中城　重信　大前　達也　浜田　広文
高野　庄司　西森　和夫　中山　政人　岡田　勝　藤村　卓司
森下　博章　能見　宗明　西村　和史　鈴木　一民　古谷　孝宏
橋田　雄二　西森　淳　藤本　幸夫　間嶋　晃
原田　和仁　野々宮浩暢　吉田　明生　森下　充晃
古橋　勝　浜田　浩清　吉村　祐二　矢野　毅
堀川　信孝　真辺　良治　大崎　正仁　山本　幸浩
三浦　正文　森岡　敏男　岡林　晴夫　石山　実
明神　圭介　森光　敦　岡村　修一　今城　正
山崎　弘通　山崎　司幸　奥代　憲彦　岩本　雅春
山本　和人　山下　健一　小野　裕次　氏原　武彦
足利　幸一　横山　政志　呉田　洋　門田　義人
池　忠憲　吉岡　一守　桜木栄二郎　坂本　秀孝
池野　雄司　吉門　卓史　芝　幹男　佐藤　賢一
石黒　豊章　大崎　賢一　瀬川　裕士　偶田　勝男
井上　靖司　大原　一郎　高橋　和史　高野　明
梅原　信一　小沢　直樹　竹村　数文　高橋　敬寿
大崎　峰喜　小野川孝一　谷山　安宏　高橋　昌也
尾目　厳洋　片田　信孝　田村　亮二　竹田　和司
門田　安信　高樽　信彦　簡井　正索　竹村　敏彦
金子　利彦　高橋　征幹　戸田　和宏　戸田　寿史
加納　祐介　中山　輝久　中島　章　藤田健一郎
刈谷　真一　西森　陽一　西岡健二郎　藤田　晴耕
斉藤　哲也　野瀬　幹雄　西森　学　藤本　一成
佐々木勝成　山崎　晴彦　西山　徹　渕山　幸二
佐々木　透　山下　幸治　野島　英夫　古谷　拓夫
加納　祐介　山本　栄二　浜口　幸則
田村　陽介　滝田　純一
津野　喜彦　山本　展士

昭和六十年

同窓会費納入のお願い

数年前から後輩達は、卒業の時点で殆んどの者が、終身会費を納めてくれています。またそれ以前の卒業の方々からも終身会費（一万円）を納入してもらっていますが、同窓生の全体から見れば僅少です。

同窓会を今後大きく発展させるためにも、未納の方はなるべく早い時期に、終身会費を納入下さるようお願いいたします。

高知県立須崎工業高等学校同窓会会則

第一章 総　則

第一条　本会は高知県立須崎工業高等学校同窓会と称する。

第二条　本会は会員の親和、母校の隆盛を図るを目的とする。

第三条　本会は本部を母校に置き、正会員多数の地域（職域）に支部を置くことができる。

第二章 事　業

第四条　本会は第二条の目的を達成するために、次の事業を行う。

(1)会報並に会員名簿の発行及び配布
(2)母校の発展に関すること
(3)会員の親和に関すること
(4)その他目的達成のために必要なこと

第三章 会　員

第五条　本会の会員は次の者をもって組織する。

1、正会員
(イ)高知県立須崎工業学校を卒業した者
(ロ)高知県立須崎工業高等学校併設中学校を卒業した者
(ハ)高知県立須崎工業高等学校を卒業した者
(ニ)(イ)(ロ)(ハ)に在籍した者で会長が推薦し理事会で認められた者
2、準会員
高知県立須崎工業高等学校在校生
3、特別会員
(イ)高知県立須崎工業学校旧職員
(ロ)高知県立須崎工業高等学校現旧職員
(ハ)(イ)(ロ)に関係し特別縁故のある者で、会長が推薦し理事会で認められた者

第四章 役　員

第六条　本会に次の役員を置く
会長一名・副会長二名（内一名は本部事務局長を兼ねる）・会計一名・常任理事若干名・理事若干名・監事二名

第七条　役員の選出は次の通りとする。
(1)会長、副会長、会計、監事は理事会において選出する。
(2)理事は総会において選出された者および母校在職正会員とする。
(3)常任理事は理事会で選出する。

第八条　役員の任務は次の通り定める。
(1)会長は本会を代表しその運営を統括する。
(2)副会長は会長を補佐し会長事故あるときは、その職務を代行する。
(3)事務局長は本部事務局を主宰し、本会の事業を執行する。
(4)会計は本会財政の運営に関し、予算収支の企画および収支の執行に当る。
(5)常任理事は本会の常務を執行する。
(6)理事は本会の重要事項を審議する。
(7)監事は本会の会計監査に当る。

第九条　本会に名誉会長を置き母校校長を推戴する。

第一〇条　会長が必要と認めたときは、理事会にはかり顧問および相談役を置くことができる。

第一一条　役員の任期は二ケ年とする。但し再任は妨げない。補欠のために就任した者の任期は前任者の残余期間とする。

第五章 会　議

第一二条　本会の会議は総会、理事会および常任理事会とする。

第一三条　総会は二年毎に開催し、必要に応じ臨時に開催する。

第一四条　総会は会長がこれを召集し、出席者の過半数で決定し、可否同数のときは議長が決定する。

第一五条　理事会は次の場合に開催する。
(1)会長が必要と認めたとき
(2)理事の過半数の請求があったとき

第一六条　理事会は総会に次ぐ決議機関で次の事項を決定する。
(1)本会の規約の作成変更および役員選出
(2)収支予算ならびに決算
(3)事業の計画およびその他重要な事項

第一七条　常任理事会は会務の迅速円滑な執行をはかるため、総会および理事会の決定にもとづき、直接業務に必要な事項を審議し実行する。常任理事会の決定および実施事項は理事会に報告し、承認を得なければならない。

第六章 事務局

第一八条　本部に事務局を置き、事務局長が統括する。

第一九条　事務局の構成は次の通りとする。

1、事務局長
2、会　計
3、母校在職正会員

第二〇条　事務局は総会、理事会、常任理事会の決定に基づき必要な会務を執行する。

第七章 会　計

第二一条　本会の財政は会費、入会金、寄附金その他の収入によってまかなう。

正会員は会費（終身会費）を納入しなければならない。

会費（終身会費）は一万円とする。

入会金は入学時二千円を納入するものとする。

第二二条　本会の会計年度は四月一日に始まり、翌年三月三一日に終る。

第二三条　本会は会計年度末に会費納入者一名に付二〇〇円の割合で支部に対する配分金を計算し、翌年度六月末までに還元する。

附　則

昭和二五年一月二〇日施行の本会則は、昭和四三年三月一日改正、昭和五一年八月一五日改正する。昭和五六年八月九日改正する。

各種証明書の発行について
（母校事務室からの伝言）

証明書が必要なときは、法令の定めにより証明書交付申請書別紙（用紙は事務室に備付）を校長宛提出しなければなりません。（第二号十八頁の様式）

申請書には必要事項記入のうえ押印し左記金額に相当する高知県収入証紙を貼付してください。遠隔地からの申込みは事務手続に相当の日数を要しますので早目に申込みをしてください。又県外には高知県収入証紙は販売していないので、切手、又は現金を同封してください。

なお返信用の封筒には切手の貼付、住所、氏名、郵便番号をお忘れなくご記入下さい。

手数料は次のとおりです。

卒業証明書	一通につき二〇〇円
成績証明書	一通につき二〇〇円
単位修得証明書	一通につき二〇〇円

送り先〒785須崎市多の郷和佐田甲四一六七ノ三
高知県立須崎工業高等学校事務室
電　話（〇八八九四）②一八六一
②一八六二

証明書の件につき不都合または不明な点等がありましたらいつでも右記電話番号の証明係までお電話ください。

編集後記

第一〇号の会報を、お送りいたします。各支部の役員、並びに会員の皆様には、原稿をお願いいたしたところ、心よく原稿を送って戴だき本当にありがとうございました。

会報の内容については、当初できるだけ会員の近況や感想等の寄稿を載せる予定でしたが、母校行事主体の会報となり反省いたしております。

今後につきましては、良い記事がありましたら事務局まで、ぜひ直接お送り下さい。次の会報に載せたいと思います。

尚印刷につきましては、須崎市内の笹岡印刷所さんにお願いし、大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。

会員の皆様の御活躍をお祈り申し上げます。

事務局編集委員

昭和六十年十一月二十日発行
発行所　高知県立須崎工業高等学校
同窓会事務局
印刷所　高知県須崎市東古市町二番十六号
有限会社　笹岡印刷所